

「イエス様の弟子の条件」(2022. 1. 16)

「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。
あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」(ヨハネ 8:31-32)

冊子「秋田の信仰者たち」には、横手教会のW兄の「生活に生きて働く信仰」という文章が紹介されている(p54)。この中で彼は、「生ける信仰とはどのような信仰を言うのでしょうか。」と問い、「信仰と生活が一体となる時に、初めて生ける信仰となるのです。」と述べている。また、今回の教会通信の会員随想でS姉は、信仰の形式がおろそかにされた所では、知識や理屈が残っても、その人の生活に力を与える信仰にならないのではないか、と指摘している。

信仰は信仰、生活は生活、と信仰と生活が別物のような言い方を聴くことがある。それはこの異教の国・日本で私たちが生きるためにはやむを得ない場面も当然あるでしょうが、問題は和賀兄のように、私たちがどれほど信仰と生活が一体となるように努めているか、鈴木姉のように、信仰の形式をどれだけ身に着けようとしているか、である。

先日、上掲のみ言葉を黙想していた時、これまで自分を「イエス様の弟子」としてあまり自覚していなかったことに気づかされた。一般に弟子は師匠の言葉に従う人である。イエス様も「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。」と言われた。ふと、信仰と生活の一体の努力の欠如、信仰の形式を身に着ける努力の欠如の一因は、この「イエス様の弟子」としての自覚の欠如にあるのではないか。み言葉を聞くには聞くが、自分の都合で行なおうとしない。「主よ、主よ」と呼んではいるが、み言葉がないがしろにする。十字架の御業で救われ、神の子とされたその恵みを原動力にしないで、そこに安住し無駄にしていけないか、そう反省させられた。

イエス様は「わたしの軛(くびき)を負い、私に学びなさい」(マタイ 11:29)と招かれている。これは、わたしの弟子となって学びなさい、と聞こえてくる。イエス様の弟子になる、それは、自由への旅である。み言葉にとどまることによって知る真理、その真理がもたらす自由への旅である。

